実空間密度汎関数法によるSiナノ構造体の大規模電子状態構造計算

筑波大学計算科学研究センター 岩田潤一

学際共同利用報告会 2010年5月7日(金) 筑波大



物性・材料科学における 第一原理計算

電子の運動を支配する量子力学の基礎原理のみに立脚 原子核の運動 古典論、電子の運動 量子論 経験的パラメータを一切含まない計算 密度汎関数理論(W. Kohn, 1998年ノーベル化学賞) 安定構造、電気伝導、光応答などを予測・解明する ・しかも定量性がある







Contents

·Siナノワイヤが注目されている

- ・ナノワイヤデバイス設計には大規模電 子状態計算が必須
- 超並列計算機を駆使した第一原理計算 手法の開発(DFT,実空間法,O(N³))
- ・数nm径Siナノワイヤの電子状態(数10
 ・原子~10,000原子超)

これまでのLSIの進化を支えた微細化の限界と 新構造トランジスタの必要性

従来型(プレーナ型)FET(電界効果トランジスタ)



これまでLSIの高性能化・省電力化・高集積化はFET (電界効果トランジスタ)の微細化によって実現されていた

しかしながら微細化を押し進めるLSIの発展は 2020~2030年に終焉を迎えると予想されている。

微細化に伴い漏れ電流増大 LSIの消費電力の大部分を占める

漏れ電流抑制のため新しい構造のトランジスタが模索されている。 中でもシリコンナノワイヤFETは究極の構造であると有力視されている。

シリコンナノワイヤFETの解析・設計には量子力学的第一原理計算が不可欠

シリコンナノワイヤFET



漏れ電流抑制(低消費電力)はもちろん、 非常に良好なデバイス特性も示す

微細化終焉後の電子デバイス として最も有望視されている

ただし「微細化」すれば高性能化・省電力化・高集積化が実現されるという、 これまでのようなシンプルなデバイス設計指針が存在しない



量子力学的シミュレーションに基づくデバイス設計指針の作成

大規模第一原理計算が必要不可欠な中核技術

シリコンナノワイヤの断面(100)と原子数(ワイヤ軸方向の周期はSiの格子定数, H終端)



実空間密度汎関数法コードによる超並列大規模第一原理計算

- ✓実空間差分法(J. R. Chelikowsky et al 1994)✓疎行列
- ✓FFTが要らない(平面波コードでは必須)
 ✓MPI (Message Passing Interface) libraryを使用
 ✓バンド&k点(固有関数のindex)並列化

KS 方程式 (finite-difference eq.)

$$\left(-\frac{1}{2}\nabla^2 + v_s[\rho](\mathbf{r}) + \hat{v}_{nloc}^{PP}(\mathbf{r})\right)\phi_n(\mathbf{r}) = \varepsilon_n\phi_n(\mathbf{r})$$



J.-I. Iwata et al., J. Comp. Phys. 229, 2339 (2010)

3D grid is divided by several regions for parallel computation.



LDA, ノルム保存擬ポテンシャル メッシュサイズ:0.45 (~14Ry) 格子点数:100,000~1,000,000

Band Structure and DOS of SiNW (d=1nm)





Band Structure and DOS of SiNW (d=8nm)

Si1361H164(1525原子), Eg=0.61eV



8nm Si nanowire : band and effective mass







有効質量近似による解析

円柱に閉じ込められた自由電子



kz方向

$$\varepsilon^{l}(\mathbf{k}) = \varepsilon_{CBM} + \frac{\hbar^{2}(k_{x}^{2} + k_{y}^{2})}{2m_{t}} + \frac{\hbar^{2}k_{z}^{2}}{2m_{l}}$$

直径8nmワイヤ

kx,Ky方向

$$\varepsilon'(\mathbf{k}) = \varepsilon_{CBM} + \frac{\hbar^2 k_x^2}{2m_l} + \frac{\hbar^2 (k_y^2 + k_z^2)}{2m_t}$$

円筒座標系での有効質量方程式

ベッセルの微分方程式

軸方向の2つの状態(重い電子)に対する閉じ込めの影響

$$\begin{bmatrix} -\frac{\hbar^2}{2m_t} \left(\frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} \right) - \frac{\hbar^2}{2m_l} \frac{\partial^2}{\partial z^2} \end{bmatrix} \Phi(\mathbf{r}) = \varepsilon \Phi(\mathbf{r}) \qquad \mathbf{\varepsilon} \boxminus \mathbf{E} \square \mathbf{E} \blacksquare \mathbf{E} \blacksquare$$

 $\Phi(\rho, \phi, \tilde{z}) = R(\rho)Q(\phi)Z(\tilde{z})$ とおくと、変数分離できて

$$\frac{\partial^2 Q}{\partial \phi^2} = -v^2 Q \qquad \longrightarrow \qquad Q(\phi) = e^{iv\phi}$$
$$\frac{\partial^2 Z}{\partial \tilde{z}^2} = -k^2 Z \qquad \longrightarrow \qquad Z(\tilde{z}) = e^{ik\tilde{z}}$$

動径部分は
$$\frac{\partial^2 R}{\partial \rho^2} + \frac{1}{\rho} \frac{\partial R}{\partial \rho} + \left(\frac{2m_t \varepsilon}{\hbar^2} - k^2 - \frac{v^2}{\rho^2}\right) R = 0$$

$$\frac{\partial^2 R}{\partial x^2} + \frac{1}{x} \frac{\partial R}{\partial x} + \left(1 - \frac{v^2}{x^2}\right)R = 0$$

$$\frac{\partial^2 R}{\partial x^2} + \frac{1}{x} \frac{\partial R}{\partial x} + \left(1 - \frac{v^2}{x^2}\right)R = 0$$

これの解はv次のベッセル関数となる

$$\begin{cases} \alpha^{2} = \frac{2m_{t}\varepsilon}{\hbar^{2}} - k^{2} \\ x = \alpha\rho \\ R = 4nm = 75.59a.u. (ワイヤ半径) \end{cases}$$
 よりエネルギーを見積もる

0次,1次のベッセル関数の零点(最初の2つ)

$$J_0(x_n) = 0$$
 $x_1 = 2.405$ $x_2 = 5.520$
 $J_1(x_n) = 0$ $x_1 = 3.832$ $x_2 = 7.016$

0次の場合

$$\alpha_1 = \frac{x_1}{R} = 0.0318$$
 $\alpha_2 = \frac{x_2}{R} = 0.0730$ (半径4nmのところで波動関数が0になる条件)

エネルギー(m_t=0.22を用いる) $\varepsilon_1^{\nu=0} = \frac{\hbar^2 \alpha_1^2}{2m_t} = 0.0626(\text{eV})$ $\varepsilon_1^{\nu=1} = \frac{\hbar^2 \alpha_1^2}{2m_t} = 0.159(\text{eV})$ $\varepsilon_2^{\nu=0} = \frac{\hbar^2 \alpha_2^2}{2m_t} = 0.330(\text{eV})$ $\varepsilon_2 - \varepsilon_1 = 0.27(\text{eV})$

8nm Si nanowire : band and effective mass





$$\frac{\partial^2 R}{\partial x^2} + \frac{1}{x} \frac{\partial R}{\partial x} + \left(1 - \frac{v^2}{x^2}\right)R = 0$$

 $v = 0 \quad (1 \pm)$ $v \neq 0 \qquad \pm v \quad (2 \pm)$





教訓:大規模で複雑な計算をしていたはずが、結果がかえって単純になる場合がある

表面ラフネスのあるシリコンナノワイヤのモデル(ワイヤ軸方向6周期分)



PACS-CS1024 nodes (peak performance : 5.6 GFLOPS/node)

Subspace diagonalization : 4600 sec. Gram-Schmidt : 2300 sec. Conjugate-Gradient Method : 3700 sec. Total Energy calc. : 1200 sec.

Total(1 step) : 12,000 sec.





.

.

.

Summary

- 2030年以降のLSIはSiナノワイヤFETが担うと目さ れている
- 単純な「微細化」という設計指針が通用しなくなっ ている 大規模電子状態計算による設計
- 超並列計算機を駆使した実デバイスサイズでの第一 原理計算 直径20nm、チャネル長10nmで200,000原子程 度のシステムになる(次世代ペタコンで可能?)
- 14,000原子程度の系の計算を約300時間で達成 複雑で大規模な計算をしていたはずが結果がかえっ て単純になる場合(近似レベルの異なる手法への橋渡し) · Si/SiO2界面(ラフネス)